

表 過去の災害被害(風水害)

西暦	年号	年	発災日 (西暦)	災害名	被災地域	規模の大きさ等	被災状況		その他(当該災害の教訓をもとに導入された制度、原資料名やその所在場所、その他)	
							(ア)概要(発災の状況、復旧・復興のためにとられた措置、経済社会的影響、各種ヒートロード等)	(イ)被害数(死者数、倒壊建物数等)		
							その他コメント	参考文献		
1757	宝暦	7	1757.5		蔵王	約1.8mの洪水(最大)	○4月26日より昼夜降り続いた大雨で、信濃川が5月1日夜から出水し、翌日には未曾有の水害となった。5月2日から5日まで平地より六尺(約1.8m)の水位の洪水になった。その後も5月27日・28日に五尺余、6月17日・18日に五尺五寸と再度の洪水に見舞われ、蔵王村の一部は刈り取られた。 ○〔経済社会〕長岡藩のこの年の収納高は1万2800俵余で、例年より4万9000俵の減収であった。			蔵王村川村絵図
1802	享和	2	1802.7	淀川大洪水	大坂(淀川沿い)	41箇所・合計3,000mにわたって堤防決壊	○6月27日から降り続いた雨は、同29日には雷を交えた暴風雨となり、淀川をはじめ各河川が増水。7月1日に淀川左岸の内国交通野田橋(枚方市楠葉周辺)や茨田郡仁和寺村(豊川市仁和寺周辺)などの堤防が決壊したため、東は葛城山脈のふもとから南は八尾久宝寺平野まで水につかった。また右岸の摂津国島上郡では堤防が約500mにわたって決壊し、高槻城内の御倉までが浸水する被害に見舞われた。摂津国西成郡でも11カ所、合計約450mの堤防が被害を受け、堂島、中之島付近は約7mの水の底に沈んだ。大坂の淀川流域では合計239村が被害を受け、堤防は41カ所・合計3,000mにわたって決壊。避難所に収容された被災者の数は約2,000人以上。	[死傷者]罹災者2,000人以上 [建物被害等]235村被害		・ http://hirakatasouth.cool.ne.jp/021018/021018.html ・ http://www.yamat.o.noc.go.jp/YKNE7/press/levee/levee3/levee42c.htm
1850	嘉永	3	1850.6	安芸国大水	倉敷周辺	360mにわたり堤防決壊	○5月29日から雨が降り、6月1日・2日と大雨になった。東高梁川は水嵩が増し、6月3日夜には安江村堤が200間(約360メートル)ほど崩れ、安江村古庄屋の居宅(ほか民家1軒・人・牛ともおぼたたく押し流され、誰の死体か分からないものも多かった。倉敷代官陣屋内まで水が入り、沖・四十瀬・堀川・笹沖・福井・八軒屋・粒浦・灘・倉敷新田・白楽市新田・白楽市・田之上・日吉・洪江のあたりは一円、軒端までも水に漬かり、人々は最寄りの笹沖山・日間山・倉敷妙見山・山之神などの山手へ逃げ上がり、アリが群れたようになった。 ○〔経済社会〕藩の対応： 倉敷新田では150軒、500人余りの飢人があり、5日より18日まで毎日御救いとして水尻常太郎方に米2石ずつ飯を炊き、郡中惣代(くんちゅうそうだい)年行司が小船に乗って家々へ配り、山へ上がっている者にも配った。 ○〔経済社会〕藩の対応： 安江村堤の切れたところには倉敷代官が出張し工事を差配した。関係村や産屋時々から支援を出したが行き届かず、都宇郡・港口郡、岡山藩領よりおよそ3千人余を出し急務(かわせ)川を掘り立て、川中へは400間ほど杭欄に土俵を築き、仮堰(かりせき)を造るなどの工事をした。幕府領と私領より数多くの人員を動員し、7月中には工事が完了した。人員数は帳面にまとめられた。飢人には一人前1合5勺ずつにぎり飯が配当された。	[死傷者]死者多数 [建物被害等]流出家屋14戸など		・ http://www.city.kurashiki.okayama.jp/koho/kohosh1/sep/sep32-1.html
1856	安政	3	1856.8	関東大震災	関東一帯		○関東諸国と信濃・駿河などの各地が激しい暴風雨に見舞われ、江戸での被害が著しく、本所・深川で出水し、海岸地域は風浪被害が大きく、築地本願寺が全壊。東京湾には高潮が発生し、近郊の沿岸地域で家屋の流出・破壊および溺死者多数。	[死傷者]死者多数 [建物被害等]流出・破壊家屋多数		・日本の自然災害
1885	明治	18	1885.6	淀川大洪水	西日本一帯	146箇所て堤防決壊	○6月上旬から梅雨前線の活動が活発化して連日のように雨が降り、15日から17日にかけては低気圧の影響で近畿地方以西に大雨が降る。大坂、広島、福岡などの各地で水害が起り、大坂では淀川の堤防が数箇所決壊。濁水が市内に流れ込み、広い範囲で浸水。	[死傷者]死者・行方不明者100人 [近畿] [建物被害等]流出家屋1,600戸、浸水家屋1万1千戸(近畿)		・日本の自然災害
1890	明治	23	1890.8	関東洪水	関東一帯	100余箇所て堤防決壊	○8月上旬から雨が続き、22日には暴風となった。このため利根川は「9合水」「10合水」に達し、千カ所余りで堤防が決壊し、開道では約30戸の家屋が流失するなど、流域各地で大きな被害をもたらした。	[建物被害等]流出家屋約30戸(開道)		・ http://www.chiba-muse.or.jp/SEK1YADC/tenji-kathleen.htm
1896	明治	29	1896.7	明治29年の大洪水	中部・関東・東北地方一帯		○7月20日から22日までの間、中部地方から東日本にかけて梅雨前線の活動による大雨が降り、木曽川、長良川、信濃川などが洪水を起して、新潟県で大洪水。岐阜県西南部一帯が泥濘化。	[死傷者]死者78人(新潟県)、死者158人(岐阜県)、死者128人(福井県)など		・日本の自然災害
1910	明治	43	1910.8	明治43年関東大水害	中部・関東・東北地方一帯	堤防決壊7,063箇所	○8月11日夜、台風が三宅島付近を通過、続いて次の台風が13日沼津付近に上陸し、北東に進んだため、東日本各地が暴風雨に見舞われた。長野県から関東一円、東北地方に至る広い範囲で被害発生。特に、関東地方では記録的な豪雨により利根川が氾濫し、東京も下町の大半が浸水するなど、明治最大の水害となった。死者・行方不明者1,359人、浸水家屋51万戸に達した。	[死傷者]死者・行方不明者1,349人、負傷者767人(全国) [建物被害等]浸水家屋51万8000戸		・日本の自然災害
1911	明治	44	1911.7	東海・関東・東北地方の風水害	東海・関東・東北地方一帯		○台風の影響で東海から関東・東北地方に風水害が生じる。静岡、神奈川、東京、埼玉、茨城、千葉各県での被害が大きく、東京湾に高潮発生し、深川洲崎で海岸堤防が決壊し、品川、深川、本所で5万余戸が浸水。神奈川県で4人、東京の深川洲崎遊郭で4人、洲崎弁天町の工場倒壊で12人が死亡。	[死傷者]死者44人(神奈川県)、死者60人(東京都)など		・日本の自然災害
1914	大正	3	1914.8	北陸・甲信越・関東各地方風水害	北陸・甲信越・関東地方一帯		○8月14日紀伊半島方面から駿河湾、房総半島へ進んだ台風の影響で、北陸・甲信越から関東地方にかけて12日から15日の間大雨が降り続き、富山県では神通川、常盤寺川、黒部川などの各河川が氾濫して大きな水害が発生し、死者・行方不明者115人、流出家屋175戸、浸水1万5千余戸に達する。関東地方では神奈川県小田原で防波堤が決壊。江戸川で線路が流失したほか、東京でも浸水家屋多数。東海道本線山北一御殿間段で鉄橋が流され、この区間が不通になる。	[死傷者]死者・行方不明者115人(富山県) [建物被害等]流出家屋175戸、浸水1万5千余戸(富山県)		・日本の自然災害

表 過去の災害被害(風水害)

西暦	年号	年	発災日 (西暦)	災害名	被災地域	規模の大きさ等	被災状況		その他(当該災害の教訓をもとに導入された制度、原資料名やその所在場所、その他)		
							(ア)概要(発災の状況、復旧・復興のためにとられた措置、経済社会的影響、各種エピソード等)	(イ)被害数(死者数、倒壊建物数等)			
1917	大正	6	1917.9	東北～近畿地方風水害	東北から近畿地方一帯			○9月30日夜半、大型の台風が駿河湾から沿岸付近に上陸し、10月1日未明に関東地方を通過、東北地方東部から北海道中部を経てオホーツク海に抜ける。この台風により東海から東北地方により風水害が発生。東京湾では高潮が起きて東京市内で浸水地域が拡大。関西でも台風の接近で秋雨前線が刺激されて大雨が続き、淀川が決壊して大阪府下で大きな水害が発生するなど、死者・行方不明者1,300人以上、損壊建物3万8800戸以上。大正時代最大の水害となる。	[死傷者]死者・行方不明者1,300人以上(大阪府) [建物被害等]損壊建物3万8800戸以上(大阪府)	その他コメント	参考文献
1921	大正	10	1921.9	中国・近畿・中部地方風水害	中国・近畿・中部地方一帯			○9月25日夜半、大型台風が紀伊半島南部に上陸し、大阪湾を通過して、敦賀付近から日本海へ抜けた。この影響で、近畿地方各地に水害が発生したのをはじめ、山陽、山陰、東海、北陸各地方にも大きな被害あり。全国の死者・行方不明者691人、負傷者187人、損壊家屋7,397戸、浸水家屋多数、被害船舶200隻。	[死傷者]死者・行方不明者691人、負傷者187人(全国) [建物被害等]損壊家屋7,397戸、浸水家屋多数、被害船舶200隻(全国)		日本の自然災害
1927	昭和	2	1927.9	九州西部・東京地方風水害	九州西部、関東			○9月13日に、台風が熊本付近に上陸し、九州を横断し、四国から本州南部沿いに進み、翌日朝、京浜、房総を通過して、三陸沖に抜けた。この影響で、九州・四国地方から関東にかけての太平洋沿岸地域が暴風雨に見舞われ、死者・行方不明者439人、損壊家屋2,211人、浸水家屋3,493戸、損失船舶多数。	[死傷者]死者・行方不明者439人(九州・四国地方から関東) [建物被害等]損壊家屋2,211人、浸水家屋3,493戸、損失船舶多数(九州・四国地方から関東)		日本の自然災害
1932	昭和	7	1932.11	中部・関東・東北地方大水害	東海・関東・東北地方一帯			○11月14日夕刻、大型台風が伊豆半島に上陸し、相模湾から房総半島を経て、翌朝鹿島灘に抜けた。この影響で、東海地方から東北地方にかけての各地が暴風雨に見舞われ、全体で死者・行方不明者257人、負傷者345人、損壊家屋1万3672戸、浸水家屋6万5081戸、損失船舶2,230隻。	[死傷者]死者・行方不明者257人、負傷者345人(全国) [建物被害等]損壊家屋1万3672戸、浸水家屋6万5081戸、損失船舶2,230隻(全国)		日本の自然災害
1934	昭和	9	1934.9	釜戸台風 ■詳細■	近畿地方	最大瞬間風速 60m(大坂)		○猛烈な暴風と大阪湾の高潮によって阪神地方を中心に大水害をもたらす、一方で岡山市でも有史以来の大水害となった。 ○大阪湾においては、水位5mのつかない高潮が発生させ、湾岸の工業地帯や市街地は大被害を受け、また大橋の3分の2が流失した。四天王寺五重塔も倒壊。 ○[経済社会]この台風の後、気象関係ではそれまで台風襲来時の風象警報だけ発表してきたのを、新たに気象情報(今の気象注意報)を設けた。すなわち、暴風警報、気象特報、天気予報の3本立てで発表されるようになり、現在の気象警報、注意報の原型が出来上がった。また、鉄道気象災害を防ぐための鉄道気象通報心得が改正された。 ○[経済社会]明治以後最大の台風災害であり、商工業の中心地帯が大きな打撃を受けたことから、日本学術振興会によって災害科学研究所が設立され、昭和12年(1937)に開所して各種対策が進められた。	[死傷者]死者・行方不明者3,036人、負傷者1万5,995人 [建物被害等]全半壊家屋9万2,750戸、浸水家屋50万1,157戸、橋梁損壊5800カ所、道路損壊1万7703カ所、堤防決壊1万1594カ所、船舶流失沈没2万7,595隻		日本災害史 日本の自然災害
1938	昭和	13	1938.7	阪神大水害	阪神地方	総雨量(7/1~7/5) 461.8mm(神戸)		○梅雨末期の豪雨が太平洋岸及び阪神地方を襲い、特に阪神地方では7月5日、未曾有の大豪雨に襲われ、神戸市引水源地や六甲連山の各河川が決壊した。六甲山地区では山崩れが2,727ヶ所に及び、この山崩れには宅地造成による崖の崩壊などもあり、都市型水害のはしりともいわれた。東海道本線、山陽本線は6日間不通となった。 ○[経済社会]こうした崩壊災害をふまえて、「市街地建築物法」が改正された。 ○[経済社会]神戸市では復興都市計画の中で災害の教訓を生かした各種立案を行ったが、戦争の影響でほとんど空文に等しい状態となった。	[死傷者]死者708人、行方不明者217人、負傷者3,393人 [建物被害等]全半壊家屋9,123戸、浸水家屋50万1,201戸、田畑被害5万2210町歩		日本災害史 事故・災害 日本の自然災害
1945	昭和	20	1945.9	初時台風 ■詳細■	九州～東北	最低気圧916hPa(秋田、上陸地) 最大瞬間風速55.3m/s(広島)		○九州や中・四国での風害が著しかったうえ、秋雨前線の活動による雨が降り続いていたところに台風の雨が重なったことから、ほぼ全国的に水害に見舞われた。鹿児島県など一部の地域では高潮災害も発生した。 ○[経済社会]台風の規模自体が超大型だったのに加えて、終戦からわずか1カ月余り後の社会混乱の最中に来襲したこと、長い間の戦争で国土が荒廃していたこと、観測通報組織が回復していなかったことなどが重なり合って、被害を拡大した面もある。 ○[経済社会]京都府では特に農作物の被害が大きく、大阪府泉南方面でも田畑が冠水、水稲やさつまいもなどの農作物に甚大な被害が出て、戦後の食糧難をいっそう深刻なものとした。	[死傷者]死者・行方不明者3,756人、負傷者2,552人 [建物被害等]全半壊家屋・流出89,037戸、浸水家屋273,285戸、田畑被害167,131ha		理科年表 http://www.river.or.jp/kwname/

表 過去の災害被害(風水害)

西暦	年号	年	発災日 (西暦)	災害名	被災地域	規模の大きさ等	被災状況		その他(当該災害の教訓をもとに導入された制度、原資料名やその所在場所、その他)	
							(ア)概要(発災の状況、復旧・復興のためにとられた措置、経済社会的影響、各種エピソード等)	(イ)被害数(死者数、負傷者数、倒壊建物数等)		
							その他コメント	参考文献		
1947	昭和	22	1947.9	カスリーン台風 ■詳細■	東海以北	雨量600mm(秩父、奥多摩)、300~500mm(東北地方)	○昭和22年9月、マリアナ諸島東方海上で発生した台風は、15日夕、伊豆半島南方を通過、房総半島南端をかすめて東方海上に走り去った。台風自体の勢力は弱く、上陸しなかったにもかかわらず、前線活動との相乗効果で記録的な豪雨を降らせた。典型的な“雨台風”だった。連合軍の占領中は台風にこのような女性名をつける方法がとられていたが、カスリーン台風はその代表的なものだった。 ○[経済社会]カスリーン台風によって、北上川の治水計画は大規模に修正され、洪水調節と発電用などを兼ねた多目的ダム建設をはじめとする大規模改修事業がスタートした。 ○[経済社会]戦後の混乱がまだ収まっていなかった時代であったため、食料が不足していた上、被災者の救援や防疫体制も十分整っていなかったため、食糧の供給や伝染病予防などの面でも進駐軍の協力を仰ぐこととなった。	[死傷者]死者・行方不明者数1,930人、負傷者1,751人 [建物被害等]全・半壊家屋・流出9,298戸、浸水家屋385,753戸、田畑被害303,659町歩		・理科年表 ・国会議事録 ・地域防災データベース http://www.river.or.jp/kwname/ ・日本の自然災害
1948	昭和	23	1948.9	アイオン台風 ■詳細■	西国～東北(特に岩手)		○罹災の府県は茨城県、群馬県、神奈川県、福島県、千葉県、静岡県、埼玉県、三重県、兵庫県、岩手県、宮城県の十一県だが、その中で岩手県と宮城県が一番被害が大きかった。田畑の害、道路決壊、橋梁流失、堤防の決壊、鉄道不通、船舶流失等の相当の被害があった。 ○[経済社会]渡良瀬川、白川、粕川、荒砥川等で、その山麓における砂防工事を本格的に大規模に着工し、被災を防ぐ必要性が認識された。 ○[経済社会]早稲米を三千石、秋田県から岩手県に輸送。輸入小麦粉の四百五十トンを、大船渡と宮古に発送。被災者一人当たり味噌五十匁、醤油二合、味噌一ポンド、煉乳若干を被災人員に応じて急送した。 ○[経済社会]治山治水の必要性が認識され、TVA方式による多目的ダムの建設を柱とした国土開発計画が提唱され、昭和25年(1950)に国土総合開発法が制定されるにいたる。	[死傷者]死傷者838人 [建物被害等]全・半壊建物138,052戸		・理科年表 ・国会議事録
1949	昭和	24	1949.8	ジュディス台風	九州、西国	降水量588mm(佐賀)865mm(霧島)	○この台風は鹿児島県志布志湾に上陸し、九州を横切り、朝鮮半島で東に進路を転じ、若狭湾で消滅した。九州地方北部に豪雨をもたらした。通信、交通網を断絶させた。	[死傷者]死者・行方不明者179人、負傷者213人 [建物被害等]全・半壊家屋・流出2,561戸、浸水家屋10万1,995戸、船舶流失沈没123隻		・事故・災害
1949	昭和	24	1949.8	キティ台風 ■詳細■	中部～北海道		○マーカス島の東方に発生した台風で、発生位置が普通の台風より北寄りの珍しいものであり、発生してから段々進路が西北にそれて関東地方一体に著しい被害を与えた。初めは熱帯性低気圧程度のものであったが、それが本格的台風へと発達した。 ○[経済社会]台風に伴う潮風が相模平野の深くまで入り込んだため、塩害が生じて農作物や果樹類に多大の被害が出た。	[死傷者]死傷者160人 [建物被害等]全・半壊建物161,263戸		・理科年表 ・国会議事録
1950	昭和	25	1950.9	ジェーン台風 ■詳細■	西国以北(特に大阪)	中心気圧960hPa 瞬間最大風速58m/s(神戸)、55m/s(大阪) 高潮2.5メートル(大阪湾)	○昭和25年9月3日、南方洋上から北進してきたジェーン台風は、室戸台風(昭和9年)とほぼ同じコースをたどった。室戸岬から淡路島を経て、神戸付近から若狭湾へと抜けた後、北海道に再上陸した。神戸付近での中心気圧は960hPaに達し、きわめて勢力の強い台風だった。その通過に伴って、西国から近畿・北陸地方に風速30m/sを越す暴風雨が吹き降った。特に大阪湾から瀬戸内海東部にかけて高潮が発生、強風による高波とともに、沿岸地区に押し寄せ、大阪市西部から尼崎市の臨海部に甚大な被害を与えた。 ○[経済社会]特に西部の低地帯での浸水被害は、昭和の初めごろから1～1.5mも地盤沈下していたのが最大の原因だった。この問題は室戸台風のと時から指摘されていたが、戦争中の対策が進まなかった経緯もあり、ジェーン台風をきっかけに、改めて地下水の過剰な汲み上げが問題となった。大阪府、市は工業用水道事業と地下水の使用制限強化に乗り出した。	[死傷者]死者・行方不明者593人、負傷者26,062人 [建物被害等]全・半壊・流出家屋19,131戸、半壊家屋101,792戸、床上浸水93,116戸、床下浸水308,960戸		・理科年表 ・国会議事録 http://www.river.or.jp/kwname/ ・日本の自然災害
1951	昭和(1)	26	1951.7	大雨(前線)	中部以西(特に京都)		京阪神地方を中心に中部から九州地方にかけて梅雨前線による豪雨が続き、特に京都府の被害は甚大で、京都市内では短時間に98mmの雨量を記録し、市内の各河川が氾濫し、鴨川では正面橋など8つの橋が流失した。	[死傷者]死傷者306人 [建物被害等]全・半壊建物105,883戸		・理科年表 ・事故・災害
1951	昭和(2)	26	1951.10	ルース台風 ■詳細■	全国(特に山口)		○九州、西国及び中国地方が最も大きな被害を受けた台風で、鹿児島県枕崎付近では、瞬間風速が約六十四メートルを記録し、前例を見ないものとなった。 ○[経済社会]警察予備隊(現在の自衛隊)約300人が住民救助と災害復旧のために初めて出動した。 ○[経済社会]当時の日本の電力事情は、石炭不足のため火力発電が振るわず、水力発電に依存する状態であった。この年の夏は異常増水であったため、水力発電による発電量が減少し、一部地域では電力の使用制限が行われるほど危惧的な状態であった。ルース台風は多大な被害をもたらす一方で、河川の流量を増やし、緊急停電が回避できる状況になった。	[死傷者]死傷者973人 [建物被害等]全・半壊建物359,391戸		・理科年表 ・国会議事録 ・事故・災害
1952	昭和	27	1952.7	大雨(前線)	中国～東海			[死傷者]死傷者150人 [建物被害等]全・半壊建物161,691戸		・理科年表

表 過去の災害被害(風水害)

西暦	年号	年	発災日 (西暦)	災害名	被災地域	規模の大きさ等	被災状況		その他(当該災害の教訓をもとに導入された制度、原資料名やその所在場所、その他)
							(ア)概要(発災の状況、復旧・復興のためにとられた措置、経済社会的影響、各種エピソード等)	(イ)被害数(死者数、倒壊建物数等)	
1953 (1)	昭和	28	1953.6	大雨(前線) ■詳細■	九州へ中国(特に熊本)	雨量 500mm(関門・北九州、和歌山県北部～奈良県南部)	<p>○北部九州の豪雨は、東シナ海から伸びてきた湿舌が停滞していた梅雨前線を刺激して6月25日から26日まで激しく降り続いた。熊本地方では26日夜までの雨量が500mmを超えた。阿蘇山では火山急斜面の表土が崩れ、山頂が起きた。白川に流れこんだ大量の火山灰は、山麓の田畑流失による土砂とともに、灌流となって熊本市に押し寄せた。市内は埋積層18万もの土砂が埋め尽くし、一面の泥海となって、多数の死者を出した。福岡県でも矢部川、遠賀川、筑後川などが氾濫。久留米市が濁流につかるなどの被害が出た。</p> <p>○関門トンネル内にも濁流が流れ込み、下関～門司間は7月中旬まで不通となった。</p> <p>○[経済社会]この水害は典型的な地域性の集中豪雨によるもので、上流部での山崩れと下流部での出水・氾濫が同時に起きたのが特徴だった。北九州の豪雨被害に次ぐ局地豪雨の発生で、治水対策は大きなターニングポイントを迎えた。</p> <p>○[経済社会]筑後川は明治以降国による改修工事が進められてきたが、この水害で堤防決壊が20ヶ所以上に及んだことから、堤防補強だけでは御座りできないと考え、上流部に下釜、松原の両ダム建設を含む抜本的治水計画が昭和32年(1957)に策定され、実行された。関門トンネルの浸水被害を受けて、トンネルの両入口に500トンの水圧に耐えうる防水壁を設置した。</p>	<p>[死者]死者758人、行方不明者265人、負傷者2,720人</p> <p>[建物被害等]全・半壊家屋・流出35,655戸、浸水555,653戸、船舶被害618隻、田畑被害50,185ha</p>	<p>・理科年表 ・事故・災害 ・http://www.river.or.jp/kwname/</p>
1953 (2)	昭和	28	1953.7	南紀豪雨	全国		<p>○全国的な大雨だったが、特に和歌山県を中心とした近畿地方南部では記録的な豪雨となり、有田川、日高川、熊野川、貴志川などが決壊し、和歌山県では全耕地の半分が冠水した。</p>	<p>[死者]死者1,125人</p> <p>[建物被害等]全・半壊建物97,368戸</p>	<p>・理科年表 ・事故・災害 ・http://www.river.or.jp/kwname/</p>
1953 (3)	昭和	28	1953.9	台風第13号	全国(特に近畿)	最大雨量 1.017mm(大台ヶ原)	<p>○グアム島付近に発生した台風13号が三重県の志摩半島を断断し、愛知県の和歌山島に上陸すると、南アルプス、北アルプス、上越山岳地帯と日本の高山地域を通るといふ今までの台風にはない進路をとり、三陸沖へ抜けた。東海道本線を不通とさせ、京都府や福井県などに大きな土砂崩れの被害を与えた。</p> <p>○[経済社会]この台風の高潮被害をきっかけに、1956年に「海岸法」が公布され、海岸堤防を築いて災害を防ぐこととなった。</p>	<p>[死者]死者578人</p> <p>[建物被害等]全・半壊建物582,273戸</p>	<p>・理科年表 ・日本災害史 ・事故・災害</p>
1954 (1)	昭和	29	1954.9	台風第12号	関東以西		<p>○この台風は室戸台風以来の大型台風として、上陸前から日本各地では警戒体制に入っており、また上陸時の中心気圧は950ミリバール、暴風半径は500キロであったが、上陸後は予想以上に急速に勢力を弱めていった。普通の台風の1.0倍の大きさの目をもちつたこと、大きすぎて、上陸後は中心から自己崩壊していったと考えられた。</p>	<p>[死者]死者・行方不明者156人、負傷者311人</p> <p>[建物被害等]全・半壊・流出家屋3万9,855戸、浸水家屋18万1,855戸、船舶被害688隻</p>	<p>・理科年表</p>
1954 (2)	昭和	29	1954.9	洞爺丸台風 ■詳細■	全国	速度 80km/h(奄美大島西方)、100km/h(宮崎西方) 気圧 956hPa(北海道西岸)	<p>○この台風は速度がきわめて早く、奄美大島西方で80km/h、宮崎西方で100km/hを観測、そのスピードのまま日本海を北上した。九州通過時には970hPaだったものが、日本海上でむしろ発達、北海道西岸では956hPaを記録したほど。被害はもっぱら強風によるもので、日本本土に及んだ。</p> <p>○[経済社会]北海道と本州を海底で結ぶ青函トンネルが着工されるきっかけとなったのは、死者・行方不明者1761人のかけがえのない生命を奪った洞爺丸台風だった。この台風は台湾付近から加速しながら北上、9月26日未明に九州南部に上陸した後、猛スピードで中国地方を縦断、山陰沖から日本海を北上して夕方から夜半にかけて北海道西岸を走り抜けた。典型的な「風台風」で、被害は主に強風によるものだった。中でも函館港内で洞爺丸が転覆、世界海難史上第2位の惨事となった。</p>	<p>[死者]死者・行方不明者1,761人、負傷者1,601人</p> <p>[建物被害等]全・半壊・流出家屋8,396戸、半壊家屋21,771戸、床上浸水17,569戸、被害船舶5,581隻</p>	<p>・理科年表 ・国会議事録 ・http://www.river.or.jp/kwname/ ・日本の自然災害</p>
1957	昭和	32	1957.7	課早水害 ■詳細■	九州(特に長崎)	日雨量 1109mm(島原半島北部)	<p>○昭和32年7月25日から26日朝にかけて、長崎県課早市を襲った集中豪雨災害は、局地的豪雨の猛威をみせつけると同時に、都市を流れる中小河川の洪水対策の重要性を改めて認識させた。課早市に近い島原半島北部では、1日の雨量が1109mmと、当時の日本最大日雨量を記録した。このため、各地で河川の氾濫、山崩れが続出した。とりわけ課早市北方の多良岳では、200ヶ所に山頂が崩れ、崩れた土砂や流木、岩塊が河川沿いに流れ出し、課早市を流れる本明川は異常な洪水を起した。市街地の大部分は一瞬のうちに泥と泥水の中に埋もれた。</p> <p>○[経済社会]隣の大村市では課早市を上回る雨量を記録したものの、床上浸水戸数を除く被害は課早市よりはるかに少なかった。これは課早市が本明川の狭窄部の出口で傾斜変換地点に位置していたため、洪水流に土砂が混じり、河川の地形の関係から土砂の混入が少なかったことが幸いした結果といわれる。この水害を契機として、局地的豪雨の発生原因と予報についての研究が始まった。</p>	<p>[死者]死者・行方不明者992人、負傷者3,860人</p> <p>[建物被害等]全・半壊・流出家屋1,565戸、家屋床上浸水25,056戸、田畑被害53,566町歩</p>	<p>・理科年表 ・事故・災害 ・http://www.river.or.jp/kwname/</p>
1958	昭和	33	1958.9	狩野川台風 ■詳細■	近畿以北(特に静岡)	中心気圧 960～955hPa 最大風速 50m/s 雨量 500mm(東京)	<p>○この台風は南方海上での中心気圧877hPaという戦後最大の超大型台風だったが、伊豆半島南端に達したときには急速に衰えて、上陸時は960～955hPa、最大風速50m/sとなり、風による被害はそれほどでなかった。しかし、秋雨前線を刺激して、25日から降っていた雨が26日朝から豪雨になり、台風の通過まで降り続いた。天城山の雨量は2日間で600mmを超えた。山間部では山崩れが続出、大量の土砂と流木が狩野川に流れ込み、下流の堤防は相次いで決壊した。修善寺、長岡などの中伊豆温泉郷では多くの建物が土台だけ残して押し流され、宿泊客など多数の死者・行方不明者を出した。</p> <p>○[経済社会]神奈川県内でも鶴見川の氾濫で園田や園鉄(現JR)線路が水につかり、2日間わたって通行不能の状態に陥った。横浜、川崎の近郊で新しく造成された住宅地ではがけ崩れが多発、家屋が倒壊して多数の死者を出した。特に横浜市港北、南、保土ヶ谷区などの粗悪な造成地での被害がめつろ、これを契機に宅地造成規制を求める声が高まり、建築基準法に規制事項が加えられることになった。しかし、これだけでは不十分で、その後住宅地での崩壊災害がたびたび起きるようになる。</p>	<p>[死者]死者・行方不明者1,269人、負傷者1,138人</p> <p>[建物被害等]全壊家屋1,289戸、半壊家屋2,157戸、流失家屋829戸、床上浸水132,227戸、床上浸水389,588戸、田畑流失・埋没・冠水89,236ha、船舶沈没・流失・破損260隻</p>	<p>・理科年表 ・国会議事録 ・http://www.river.or.jp/kwname/ ・日本の自然災害</p>

表 過去の災害被害(風水害)

西暦	年号	年	発災日 (西暦)	災害名	被災地域	規模の大きさ等	被災状況		その他(当該災害の教訓をもとに導入された制度、原資料名やその所在場所、その他)	
							(ア)概要(発災の状況、復旧・復興のためにとられた措置、経済社会的影響、各種エピソード等)	(イ)被害数(死者数、倒壊建物数等)	その他コメント	参考文献
1972	昭和	57	1972.7	S57.7月豪雨 ■詳細■	全国	雨量 500mm(中国山地西部)	<p>○昭和57年7月、梅雨前線の活動がにわかには活発になり、小台風第6号の影響も加わって、全国各地に記録的な豪雨が降った。この年の梅雨は、6月まで西日本に6回の大雨が降り、各地に被害が出たものの、降水量は平年の半分程度とみられていた。ところが、7月に入ると状況が一変、豪雨による河川の氾濫や山崩れ・がけ崩れが相次いだ。特に秋田県を中心とする東北北部や岐阜、愛知、神奈川、島根、広島各県が大きな被害に見舞われた。</p> <p>○[経済社会]9日～12日には中国から北九州にかけて激しい雨が降った。中国山地西部では総雨量が500mmに達する集中豪雨となり、島根、広島県を中心に山崩れや洪水被害が相次いだ。島根県では江川の氾濫で江津市などが濁流にのまれたほか、宍道湖があふれて松江市の市街地の9割が水につかった。これは斐伊川の中流域が災害復旧事業によって破壊を逃れたため、かえって洪水が宍道湖に流入したもので、斐伊川治水が改めて重要課題になった。</p>	<p>[死傷者]死者・行方不明者 557人、負傷者 1,056人 [建物被害等]全壊・流出家屋 2,977戸、半壊家屋 10,205戸、浸水家屋 332,000戸、田畑被害 156,000ha</p>		<p>・理科年表 ・http://www.river.or.jp/kwname/</p>
1974	昭和	49	1974.9	多摩川水害	東京都狛江市		<p>○台風16号による大雨で多摩川が増水し、その激流が東京都狛江市狛方地区を襲い、同地区に設置してあった宿河原堰を乗り越え、堰の左岸の取り付け部分の護岸が崩壊した。</p> <p>○[経済社会]被災住民らは国に対し、河川管理上に欠陥があったとして損害賠償を求める「多摩川水害訴訟」を起こし、東京高裁は住民側の主張を認めた判決を出した。これは「洪水天災論」を成めたものとして画期的なものであった。</p>	<p>[建築物被害等]全・半壊建物19戸</p>		<p>・日本災害史 ・事故・災害</p>
1975	昭和	50	1973.9	台風第8号・前線	沖縄～中部			<p>[死傷者]死傷者 111人 [建物被害等]全・半壊建物150,382戸</p>		<p>・理科年表</p>
1976 (1)	昭和	51	1976.7	台風第5・6号	四国～北海道			<p>[死傷者]死傷者 110人 [建物被害等]全・半壊建物102,185戸</p>		<p>・理科年表</p>

表 過去の災害被害(風水害)

西暦	年号	年	発災日 (西暦)	災害名	被災地域	規模の大きさ等	被災状況		その他(当該災害の教訓をもとに導入された制度、原資料名やその所在場所、その他)
							(ア)概要(発災の状況、復旧・復興のためにとられた措置、経済社会的影響、各種エピソード等)	(イ)被害数(死者数、倒壊建物数等)	
							その他コメント	参考文献	
1976 (2)	昭和	51	1976.9	台風第17号・前線 ■詳細■	全国	総雨量 2781mm(徳島県日早)	○昭和51年9月、台風第17号は九州南方海上で3日間、足踏みした。13日に長崎市付近に上陸した後、北に進んで日本海に抜けたが、台風の接近に伴って関東以西では秋雨前線の活動が活発になり、激しい雨が降り続いた。台風は停滞して、いつ降り止むとも知らぬ豪雨は、西日本を中心に連続6日間にわたり、各地に深いつめ跡を残した。強風、波浪、山津波、浸水、東京・山の手の出水など多様な風水害のオンパレードとなった。中でも岐阜県安八町で一級河川の長良川が決壊したことは治水関係者に衝撃を与えた。 ○[経済社会]防災性能の高い一般河川の堤防でさえ総雨量1000mmを越す豪雨には耐えきれぬものではないことが示す結果となり、長雨に対する備えが必要であることを痛感させた。	[死傷者]死者・行方不明者 171人、負傷者 537人 [建物被害等]全壊・流出家屋 1,695戸、半壊家屋 3,675戸、家屋床上浸水 102,313戸、家屋床下浸水 533,392ha	・理科年表 ・地域防災データ総覧 ・ http://www.river.or.jp/kwname/
1982	昭和	57	1982.7	S57.7月豪雨 ■詳細■	関東以西	1時間雨量 150~150mm(長崎地方)	○昭和57年7月の梅雨末期、長崎市を襲った集中豪雨は、現代都市の災害に対する脆弱性を見せつけるものだった。前線活動により、西日本一帯に降った豪雨は各地に被害をもたらしたが、中でも長崎地方では1時間雨量が150~150mm、17時から25時までの7時間には200~500mmという記録的な大雨となった。 ○[経済社会]これほどの大災害となったのは、かつてないほどの激しい豪雨だったことに加えて、坂の多い地形という特殊な事情があったため。そのほか、気象台の警報が十分な効果を発揮しなかった、交通がマヒしたうえ、帰宅できない人たちが自宅への連絡や警察、消防への通報に電話に殺到した。施設自体が損傷して電話が使用不能になった。ビルの地下にあった自家発電装置が浸水して防災機能を発揮できなかったなどが被害を拡大したといわれる。これらは長崎市に限らず、現代都市に共通する防災上の盲点をさらけ出す結果となった。 ○[経済社会]長崎県ではこの水害を契機として、13箇所に「土石流予警報システム」を採用した。 ○[経済社会]長崎県では災害対策本部内に「水害相談センター」を設置し、水害に関する市民からの相談、要望などを一元的に処理する窓口として、被災後約1ヶ月間続けた。	[死傷者]死者・行方不明者 539人、負傷者 1,157人 [建物被害等]全壊・流出家屋 1,125戸、半壊家屋 1,919戸、床上浸水 56,508戸、床下浸水 166,673ha	・理科年表 ・地域防災データ総覧 ・ http://www.river.or.jp/kwname/
1982 (2)	昭和	57	1982.8	台風第10号・前線	中国~東北	総雨量 250~300mm(大阪府堺市)	○この豪雨により、各河川は増水し浸水被害が続出した。堺市での被害は、乗化被害を始め、道路、河川の決壊、橋げたの流出等広範囲に及び、被害総額は1億5,785万円に至った。 ○[経済社会]堺市対策本部では、床上浸水等による罹災者に対して、見舞金品の給付や所得税等の減免、災害援護資金の貸付等の救済措置をとるとともに、災害救助法によって各種の救助を行った。また各種団体、一般市民等から多額の義援金が寄せられ、自治会長の協力により被災者に支給された。	[死傷者]死傷者95人 [建物被害等]全・半壊建物119,215戸	・理科年表 ・地域防災データ総覧
1982 (3)	昭和	57	1982.8	台風第15号	近畿以北			[死傷者]死傷者53人 [建物被害等]全・半壊建物35,583戸	・理科年表
1985	昭和	59	1985.7	S58.7月豪雨	九州~東北			[死傷者]死傷者117人 [建物被害等]全・半壊建物20,810戸	・理科年表
1987	昭和	62	1987.8	台風第10号	東海~東北			[死傷者]死傷者21人 [建物被害等]全・半壊建物107,755戸	・理科年表
1988	昭和	63	1988.1	台風第19号	中国~近畿			[死傷者]死傷者9人 [建物被害等]全・半壊建物25,260戸	・理科年表
1990	平成	2	1990.6	大雨(低気圧・前線)	九州・近畿			[死傷者]死傷者27人 [建物被害等]全・半壊建物52,733戸	・理科年表
1990	平成	2	1990.9	台風第19号	沖縄~東北			[死傷者]死傷者50人 [建物被害等]全・半壊建物35,725戸	・理科年表
1991	平成	3	1991.9	台風第19号	全国			[死傷者]死傷者62人 [建物被害等]全・半壊建物193,512戸	・理科年表
1993	平成	5	1993.7	H5、8月豪雨 ■詳細■	西日本(特に九州南部)	1時間の雨量 105mm(鹿児島県満辺町)	○平成5年7月末から8月末にかけて、梅雨前線の活動による集中豪雨と台風が相次いで鹿児島県に襲った。県内各地で土砂災害が相次ぎ、近年に例のない多数の死傷者を出した。1時間に100mmを前後という記録的な短時間大雨によって、金峰町で斜面崩壊が発生、一瞬のうちに20人の生命を奪った。川辺町では鉄砲水が民家を襲い、9人の死者を出した。両町では続く台風第13号でも土砂災害に見舞われ、さらに30人が死亡した。 ○[経済社会]この豪雨は土砂災害の大半が危険箇所を担当していない地区で発生しており、その後の土砂災害対策に大きな教訓を残した。	[死傷者]死者・行方不明者 151人 [建物被害等]全壊・流出家屋 861戸、半壊・一部破損家屋77342戸、床上浸水20365戸、床下浸水 52112ha	・理科年表 ・ http://www.river.or.jp/kwname/
1993	平成	5	1993.8	台風第13号	全国(沖縄を除く)	最大瞬間風速 51.3m/s 総雨量 300mm	○台風第13号は9月3日、薩摩半島に上陸、鹿児島県を縦断した。直撃を受けた鹿児島市では最大瞬間風速51.3m/sの強風が吹き荒れた。各地で集中豪雨に見舞われ、総雨量は多いところで300mmに達した金峰町、川辺町の被害はこの台風に伴うもの。その後、20日になって、日吉町で大規模な地滑りが発生、民家2戸全壊、死者2人の被害を出した	[死傷者]死傷者58人 [建物被害等]全・半壊建物12,339戸	・理科年表 ・ http://www.river.or.jp/kwname/

表 過去の災害被害(風水害)

西暦	年号	年	発災日 (西暦)	災害名	被災地域	規模の大きさ等	被災状況		その他(当該災害の教訓をもとに導入された制度、原資料名やその所在場所、その他)	
							(ア)概要(発災の状況、復旧・復興のためにとられた措置、経済社会的影響、各種エピソード等)	(イ)被害数(死者数、倒壊建物数等)		
							その他コメント	参考文献		
1995	平成	7	1995.7	H 7 梅雨前線 ■詳細■	上・信越	総雨量 500mm以上(新潟・長野・富山県境の白馬連山)、約 500mm(姫川)、200~220mm(関川) 日雨量 256mm(関川源流部の笹ヶ峰ダム)、255mm(姫川上流部の南小谷)	○北陸地方に梅雨前線が停滞、平成7年7月11日から降り始めた豪雨は、信越地方を中心に、河岸の決壊、土砂の流出による河床の異常な上昇を引き起こした。家屋の全半壊、浸水、道路・鉄道の途絶、孤立地区の発生、田畑の流出などの甚威を及ぼした。とりわけ長野、新潟両県にまたがる関川・姫川両水系の被害が甚大。一般の被害は比較的小なもので、道路、鉄道などの公共施設は各所で分断されており、豪雨が去った後、R 大糸線の工事は始まったが全線開通のめどは立っていない。 ○[経済社会]この豪雨を契機に、水系一貫した河道の安定、土砂の管理について検討する必要があるとされている。	[死傷者]死者・行方不明者 5人、負傷者 8人 [建物被害等]全壊 82戸、半壊 一部破損家屋 271戸、床上浸水 2,159戸、床下浸水 15,516ha		・埋料年表 http://www.river.or.jp/kwname/
1996	平成	8	1996.7	H 8 梅雨前線	九州	1時間の雨量 103.5mm(熊本県入吉市)、79.0mm(宮崎県宮崎市)	○3日、梅雨前線が九州地方に停滞し、活動が活発となったため、九州地方で猛烈な雨となったところがあった。このため熊本・宮崎両県で浸水、山・がけ崩れなどの被害が発生した。 ○東北地方では上空に寒気が流れ込んだ大気の状態が不安定となり、東北地方の一部では雷やひょうを伴った激しい雨が降った。落雷により2名が死亡した。	[死傷者]死者 2人、負傷者 16人 [建物被害等]住家全壊 1棟、床上浸水 23棟、床下浸水 556棟		・気象庁Webサイト http://www.data.kishou.go.jp/
1996	平成	8	1996.8	台風第12号	南西諸島・西日本	期間降水量 540mm(宮崎県えびの市) 最大瞬間風速 58.5m/s(鹿児島市)	○台風第12号は、8月6日に奄美大島の南海上で発生し、12日15時過ぎに沖縄本島中部を通過し、北東に運んで、14日10時過ぎに強い勢力で熊本市付近に上陸した。台風は九州北部を通過して14日15時過ぎに山口県徳山市付近に再上陸し、日本海に進んで、15日06時半頃佐渡島を通過し、15日09時頃新潟県上市付近に再上陸した。その後東北南部を通過して三陸沖から北海道東海上に進み、16日に温帯低気圧に変わった。	[死傷者]死者 5人、負傷者 85人 [建物被害等]住家全壊 11棟、半壊 60棟、床上浸水 76棟、床下浸水 1,796棟		・気象庁Webサイト http://www.data.kishou.go.jp/
1996	平成	8	1996.8	台風第17号	関東・伊豆諸島	期間降水量 391mm(東京都新島村) 最大瞬間風速 51.9m/s(千葉県銚子市)	○台風第17号は、9月13日にフィリピンの東海上で発生し、発達しながら北西の北東に進み、22日午前強い勢力で八丈島の西の海上を通り、午後には房総半島の東海上を北北東に進んだ。その後三陸沖から、23日には北海道東海上を進み、同日千島近海で温帯低気圧に変わった。 ○この台風の中心付近を通過した房総半島など関東地方南部や、伊豆諸島で暴風雨になった。	[死傷者]死者 13人、負傷者 96人 [建物被害等]住家全壊 13棟、半壊 68棟、床上浸水 2,900棟、床下浸水 10,018棟		・気象庁Webサイト http://www.data.kishou.go.jp/
1997	平成	9	1997.6	台風第8号	九州・四国・北陸・東北	日降水量 331mm(鳥取県鹿野町)、252mm(新潟県中条町)	○6月24日、フィリピンの東海上で発生した台風第8号は、発達しながら北上し、27日の朝に宮古島と沖縄本島の間を通り、28日9時過ぎに長崎県西彼杵半島に上陸した。台風は、九州地方北部を横断し、瀬戸内海を通過して28日17時前に岡山県に再上陸した。その後、近畿地方北部から関東地方北部を通過して、29日早朝三陸沖に進み、29日06時に同海域で温帯低気圧に変わった。 ○この台風により、西日本各地で期間降水量が200mmを超える大雨となった。また、北陸地方や東北地方でも期間降水量が200mm前後となったところがあった。南西諸島から西日本にかけて、暴風となったところがあった。	[死傷者]死者 3人、負傷者 47人 [建物被害等]住家全壊 3棟、半壊 5棟、床上浸水 45棟、床下浸水 906棟		・気象庁Webサイト http://www.data.kishou.go.jp/
1997	平成	9	1997.7	H 9 梅雨前線	西日本・中部	期間降水量は、1,495mm(岐阜)、1,023mm(福岡県大牟田市)	○1日から17日にかけて梅雨前線が日本付近に停滞し、この期間九州から東北にかけて、各地で大雨となった。このうち、前線の活動が活発となった6日から13日にかけて、九州、中国、中部地方で激しい雨が降った。特に、9日から10日にかけて、長崎、熊本、鹿児島県では、2日間続けて日降水量が200~300mmとなり、2日間の合計降水量が500mm前後に達した所があった。 ○この豪雨のため、10日に鹿児島県出水市では大規模な土石流が発生し21人が死亡した。	[死傷者]死者 26人、負傷者 17人 [建物被害等]住家全壊 36棟、半壊 20棟、一部損壊 94棟、床上浸水 388棟、床下浸水 8,786棟		・気象庁Webサイト http://www.data.kishou.go.jp/
1997	平成	9	1997.7	台風第9号	四国~東海	期間降水量 958mm(奈良県北上山村) 最大風速 26.6m/s(三重県津市)、37.5m/s(室戸岬) 最大瞬間風速 52.2m/s(室戸岬)	○台風第9号は、7月20日にフィリピンの東海上で発生し、日本の南海上を発生しながら北上して、26日17時過ぎに強い勢力で徳島県阿南市付近に上陸した。その後、播磨灘をとり、26日21時前に岡山県備前市付近に再上陸し、中津地方を横断した。27日に山陰沖に進んで停滞し、28日6時に同海域で熱帯低気圧になった。この熱帯低気圧は、28日夜から29日朝にかけて北陸地方西部から東海地方に南下し、31日に紀伊半島の南海上で消滅した。 ○この台風と熱帯低気圧により、東海地方から近畿、四国、中国地方で大雨となった。特に紀伊半島では、26日を中心に豪雨となり、山沿いを中心に期間降水量が600~800mmとなった。また広島県や島根県でも期間降水量が500mmを超えたところがあった。26日には、四国から東海にかけて、20m/s前後の風が吹いた。	[死傷者]負傷者 46人 [建物被害]住家全壊 12棟、半壊 7棟、一部損壊 183棟、床上浸水 406棟、床下浸水 2,710棟		・気象庁Webサイト http://www.data.kishou.go.jp/
1997	平成	9	1997.8	前線・台風第11号	全国	期間降水量 708mm(長崎県平戸市)、511mm(北海道福島町)	○3日から13日の間、前線が北海道から九州にかけて北上・南下を繰り返した。また、台風第11号が6日から7日にかけて沖縄地方を通過し、8日に九州の西海上を北上して、9日に日本海中部で温帯低気圧に変わった。この低気圧は、10日にかけて北海道を通過した。この期間、前線活動が活発になったことや台風、低気圧の影響で全国各地で大雨となった。	[死傷者]負傷者 4人 [建物被害等]住家全壊 2棟、半壊 6棟、一部損壊 20棟、床上浸水 66棟、床下浸水 559棟		・気象庁Webサイト http://www.data.kishou.go.jp/
1997	平成	9	1997.9	台風第19号	九州・西日本・東海	日降水量 688mm(宮崎県えびの市) 期間降水量 969mm(宮崎県えびの市) 最大瞬間風速 49.0m/s(鹿児島県枕崎町)	○台風第19号は、9月4日にマーシャル諸島の東海上で発生し、発達しながら西に進んだ。15日奄美諸島近海で北に向きを変え、16日8時過ぎ強い勢力で鹿児島県枕崎町付近に上陸した。台風は、九州を縦断し、瀬戸内海を通過して17日0時頃岡山県倉敷市付近に再上陸した。その後、17日早朝に若狭湾に進んで、6時には温帯低気圧になり、日本海沿いに北東進し、その後、 ○この台風により、奄美諸島から九州、四国の太平洋側、中国地方、紀伊半島から東海地方を中心に大雨となった。また台風が強い勢力で上陸したため、九州南部を中心に暴風となったところがあった。	[死傷者]死者 10人、負傷者 26人 [建物被害等]住家全壊 35棟、半壊 39棟、一部損壊 1,194棟、床上浸水 4,010棟、床下浸水 13,535棟		・気象庁Webサイト http://www.data.kishou.go.jp/

表 過去の災害被害(風水害)

西暦	年号	年	発災日(西暦)	災害名	被災地域	規模の大きさ等	被災状況		その他(当該災害の教訓をもとに導入された制度、原資料名やその所在場所、その他)	
							(ア)概要(発災の状況、復旧・復興のためにとられた措置、経済社会的影響、各種ヒソード等)	(イ)被害数(死者数、倒壊建物数等)	その他コメント	参考文献
1998	平成	10	1998.8	梅雨前線	北陸・東北(日本海側)	日降水量 265mm(新潟市)	○梅雨前線が日本海から北陸地方に停滞し、太平洋高気圧の西側から暖湿気流が前線に向かって流れこみ、前線の活動が活発となったため、北陸から東北の日本海側で断続的に大雨が降った。特に3日から4日にかけて、新潟県下越、佐渡を中心に記録的な豪雨となった。 ○新潟市の4日の日降水量は265mmとなり、観測開始(明治19年)以来第1位の記録となった。このため新潟市を中心に浸水など大きな被害があった。	[死傷者]死者 2人、負傷者 5人 [建物被害等]住家全壊 3棟、半壊 16棟、一部損壊 18棟、床上浸水 2,560棟、床下浸水 15,134棟		・気象庁Webサイト http://www.data.kishou.go.jp/
1998	平成	10	1998.8	前線・台風第4号	中部～北海道	日降水量 607mm(栃木県那須町) 期間降水量 1,254mm(栃木県那須町)	○26日から31日にかけて、前線が本州付近に停滞した。一方、台風第4号が日本の南海上をゆっくり北上した。この間、日本の東の高気圧と台風の影響で、前線に向かって暖湿気流が流入したため、北日本から東日本にかけて断続的に大雨が降った。特に、26日夜から27日朝にかけて、栃木県と福島県境付近を中心に記録的な豪雨となった。 ○栃木県、福島県を中心に、広い範囲で土砂崩れや浸水による被害があった。	[死傷者]死者 22人、行方不明者 2人、負傷者 55人 [建物被害等]住家全壊 101棟、半壊 156棟、一部損壊 249棟、床上浸水 3,329棟、床下浸水 11,518棟		・気象庁Webサイト http://www.data.kishou.go.jp/
1998	平成	10	1998.9	台風第5号	東日本～北日本	期間降水量 393mm(神奈川県箱根町)、350mm(北海道広尾町) 最大瞬間風速 45.7m/s(千葉県銚子市)	○台風第5号は、9月14日に父島の南海上で発生し、発達しながら北上して、16日04時頃静岡県御前崎付近に上陸した。台風は、関東地方から東北地方を縦断したのち、16日20時過ぎ北海道釧路市付近に再上陸し、21時に北海道東部で温帯低気圧に変わった。 ○今台風による期間降水量は東海から関東地方の山沿いを中心に300～400mm、北海道の一部でも300mmを超える大雨となった。また、東海地方から北海道までの太平洋側を中心に最大瞬間風速が30m/sを超えたところがあった。	[死傷者]死者 7人、負傷者 47人 [建物被害等]住家全壊 4棟、半壊 17棟、床上浸水 1,296棟、床下浸水 5,044棟		・気象庁Webサイト http://www.data.kishou.go.jp/
1998	平成	10	1998.9	台風第7・8号	四国・近畿・東海	期間降水量 557mm(和歌山県古座川町) 最大風速 32.4m/s(和歌山)、29.8m/s(津)、25.9m/s(三重県上野市)	○台風第8号は、9月20日に日本の南海上で発生して北上し、21日16時頃に和歌山県田辺市付近に上陸した。その後紀伊半島を北上し、21日21時に滋賀県北部付近で弱い熱帯低気圧になった。 ○台風第7号は、17日にルソン島西海上で発生し、南西諸島の東海上を発達しながら北東に進み、22日13時過ぎ強い勢力で和歌山県御坊市付近に上陸した。その後、近畿地方を北上して富山湾から日本海沿岸を進み、22日22時前に山形県鶴岡市付近に再上陸し、東北地方北部を通り、23日09時に北海道の東海上で温帯低気圧に変わった。 ○2つの台風により、四国東部、紀伊半島、東海地方を中心に大雨となった。また、台風第7号の中心が津(千葉県)付近に通過した。	[死傷者]死者 18人、行方不明者 1人、負傷者 611人 [建物被害等]住家全壊 87棟、半壊 1121棟、一部損壊 49,027棟、床上浸水 1,757棟、床下浸水 8,822棟		・気象庁Webサイト http://www.data.kishou.go.jp/
1998	平成	10	1998.9	前線	中国・四国・紀伊半島・東海	1時間の雨量 126mm(高知県須崎市)、119mm(高知県南国市) 日降水量 735mm(高知県土佐山田町)	○前線が23日から24日にかけて瀬戸内付近に北上し、25日朝まで停滞した。この前線に向かって高気圧の縁を回る暖湿気流が流れ込んだため、高知市及びその周辺で24日を中心に長時間にわたって激しい雨が降り続いた。	[死傷者]死者 9人、負傷者 14人 [建物被害等]住家全壊 31棟、半壊 32棟、一部損壊 117棟、床上浸水 9,720棟、床下浸水 9,973棟		・気象庁Webサイト http://www.data.kishou.go.jp/
1998	平成	10	1998.1	前線・台風第10号	中部以西	最大風速 29.3m/s(和歌山)	○台風第10号は、10月11日にマリアナ諸島の西海上で発生し、発達しながら西進し、14日から15日にかけて台湾の東海上に北上した。その後南西諸島の北の海上を北東に進み、17日16時半ごろ鹿児島県枕崎市付近に上陸した。台風は九州南部から日向灘へ進み、17日21時ごろ高知県宿毛市付近に再上陸し、四国を経て18日00時ごろ岡山県玉野市付近に再上陸した。その後、中国地方を経て日本海を北東に進み、18日09時津軽半島沖で温帯低気圧に変わった。一方、この期間、日本付近に前線が停滞し活動が活発となった。 ○この期間に中部地方から九州地方にかけて広い範囲で大雨になった。	[死傷者]死者 12人、行方不明者 1人、負傷者 68人 [建物被害等]住家全壊 53棟、半壊 34棟、一部損壊 1,314棟、床上浸水 3,673棟、床下浸水 10,911棟		・気象庁Webサイト http://www.data.kishou.go.jp/
1999	平成	11	1999.6	H11梅雨前線	九州～東北	1時間の雨量 100mm(福岡県藤巻町)、79.5mm(福岡県福岡市)、70mm(広島県呉市)	○日本付近は典型的な梅雨型の気圧配置となり、活発な梅雨前線の影響で23日以降、九州地方を中心に断続的に雨が降り続いた。29日から30日にかけて梅雨前線上で発達した低気圧に水蒸気を含んだ南の空気が吹き込み、寒冷前線に沿って強い積乱雲が発生したことにより、九州北部・中国地方の広い範囲で局地的な豪雨となった。 ○[経済社会]福岡市では地下に多量の水が浸水、ビル地階で女性が発死し、地下鉄の運行が中止されるなど被害が広がり、都市機能がマヒし、新たな都市型水害として衝撃を与えた。 ○[経済社会]広島市、呉市、福岡市が災害救助法の適用を受け、広島市、呉市には阪神大震災を契機に制定された被災者生活再建支援法が初めて適用された。	[死傷者]死者 39人、行方不明者 2人、負傷者 69人 [建物被害等]住家730戸、浸水 18,585戸		・損害保険料率算出機構 ディスクロージャ資料 RISK No.53
1999	平成	11	1999.7	台風第5号	西日本	最大瞬間風速 23.4m/s(大分県大分市) 日降水量 490mm(高知県池田川)、525mm(愛媛県石鎚山成就社)	○中型で並の強さの台風5号は、27日昼、九州の西の東シナ海を北西に進み、韓国・済州島沖に達した。その後、九州西海上を北上した影響で、西日本、四国を中心に強風を伴い激しい雨を降らせた。 ○[経済社会]宮崎県では収穫期を迎えた早期水稲が倒れたり、農作物にも大きな被害が出た。 ○[経済社会]宮崎県、愛媛県、高知県では避難勧告が出された。	人的被害3人、住家損壊23棟、住家浸水207棟		・損害保険料率算出機構 ディスクロージャ資料 RISK No.53
1999	平成	11	1999.8	H11.8集中豪雨	関東		○局地的な集中豪雨の影響で、関東地方を中心に家屋の浸水や道路冠水、崖崩れなどの被害が広がった。 ○各河川が増水し川岸に取り残された人などの救出活動が各地で相次いだ。特に18人のキャンプ客が集中豪雨で増水した玄倉川に流された神奈川県山北町の増水事故は、5人が救助されたものの、13人が死亡する大きな事故となった。	人的被害25人、住家損壊36棟、住家浸水4,008棟		・損害保険料率算出機構 ディスクロージャ資料 RISK No.53

表 過去の災害被害(風水害)

西暦	年号	年	発災日 (西暦)	災害名	被災地域	規模の大きさ等	被災状況		その他(当該災害の教訓をもとに導入された制度、原資料名やその所在場所、その他)	
							(ア)概要(発災の状況、復旧・復興のためにとられた措置、経済社会的影響、各種エピソード等)	(イ)被害数(死者数、倒壊建物数等)	その他コメント	参考文献
1999	平成	11	1999.9	台風第18号	九州・中国	最大瞬間風速 58.9m/s(沖縄県那覇市)、66.2m/s(熊本県宇深市)、51.9m/s(宮崎県延岡市) 最大高潮偏差 139cm(熊本県三角町)	○熊本県では強風によって送電線や住家が大きき被害を受け、一時48万世帯(熊本県内全世帯数の約54%)が停電となるなどライフラインに大きな被害が出た。また、台風の通過が大潮と重なった為、高潮による被害も大きく、不知火町では潮位が堤防を約1.4mも超え、12人が死亡した。天草地方でも高潮被害が発生したが、住民に対して避難勧告が出されていた為、人的被害は軽傷者1名にとどまった。 ○山口県でも高潮の被害が発生した。宇部空港では空港全体に浸水被害が発生し、機能が完全にマヒした。また、空港周辺地域でも事務所などなどに大きな被害が出た。山崎町でも高潮被害が発生したが、地元住民が海を見て「通常の波とは様子が異なる」と感じ、漁業組合の無線を通して避難を呼びかけたため、人的被害は軽傷者5名にとどまった。	[死傷者]死者 30人、重傷者 98人、軽傷者 1,018人 [建物被害等]全壊 333棟、半壊 3,252棟、一部損壊 100,516棟、床上浸水 5,664棟、床下浸水 12,839棟		・損害保険料率算出機構 デスクロージャ資料 RISK No.54
2000	平成	12	2000.7	台風第3号・前線	関東～北海道の太平洋側	総雨量 416mm(東京都大島町) 日雨量 357mm(宮城県雄勝町) 最大瞬間風速 49.3m/s(東京都八丈島)、41.4m/s(東京都三宅島)	○台風第3号は、7月3日フィリピンの東海上で発生し、発達しながら北北東に進み、8日早朝八丈島と三宅島の間を過ぎて、さらに厚岸半島の東海上を北上した。台風はその後北北東に進み、9日午前6時に北海道の東海上で温帯低気圧に変わった。この台風により、7日から8日を中心に関東から東北地方の太平洋側を中心に大雨となった。一方、3日から5日にかけて、上空を寒気を伴った気圧の谷が通ったため大気の状態が不安定となり、全国的に雨が降ったが、特に東北南部から関東地方にかけて雷を伴う大雨となった所があった。	[死傷者]負傷者 10名 [建物被害等]住家全損 3棟、一部損壊69棟、床上浸水 1,022棟、床下浸水 4,621棟		・損害保険料率算出機構 デスクロージャ資料 RISK No.59 ・気象庁Webサイト http://www.data.kishou.go.jp/
2000	平成	12	2000.9	H12.9東海豪雨	東海	1時間の雨量 114mm(東海)、97mm(名古屋) 2日間の累加降水量 589mm(東海)	○日本列島上空で南北振動を繰り返す秋雨前線にそって、那覇市の東南東にあった台風14号からの暖かく湿った空気が流れ込み、高気圧や前線によって雲の移動が妨げられる状況が続き、東海地方に記録的な大雨がもたらされた。 ○名古屋市内の新川が約100メートルにわたって破壊したほか、庄内川や天白川でも越水するなど、愛知県やその近県の浸水家屋は6万棟を超えて、伊勢湾台風以来の浸水災害となった。また、土砂災害も各地で発生した。 ○[経済社会]新幹線や在来線、地下鉄などの鉄道網は混乱し、名古屋市地下鉄が2日間運休するなどマヒ状態となった。電気・ガス・水道・電話・上下水道などのライフラインにも甚大な被害が発生した。 ○[経済社会]この災害を契機として、都市内河川の洪水予報のあり方が改めて問われると共に、地下鉄や地下街の水害対策にも一石を投じる事となった。	[死傷者]死者・行方不明者 10人、負傷者 107人 [建物被害等]全壊 29棟、半壊 176棟、一部損壊 199棟、床上浸水 22,432棟、床下浸水 45,889棟		・損害保険料率算出機構 デスクロージャ資料 RISK No.58 ・気象庁Webサイト http://www.data.kishou.go.jp/
2001	平成	13	2001.7	H12梅雨前線	九州	日雨量 271mm(福岡県大牟田市)、190mm(長崎県諫早市)	○梅雨前線が日本海に停滞し、西日本に暖湿な気流が流れ込んだため、12日を中心に九州北部などで大雨となった。	[建物被害等]住家一部損壊 5棟、床上浸水 66棟、床下浸水 687棟		・気象庁Webサイト http://www.data.kishou.go.jp/
2001	平成	13	2001.8	台風第11号	東海・東日本	日降水量 549mm(三重県尾鷲市) 最大瞬間風速 33.1m/s(三重県津市)、38.2m/s(潮岬)	○台風第11号は、8月14日にマリアナ諸島近海で発生し、日本の南海上を北西からの北東に進み、21日19時過ぎ和歌山県田辺市付近に上陸した。台風は、22日4時過ぎに三重県南部(志摩半島付近)を通過し、12時ごろに静岡県沼津市付近、14時過ぎに神奈川県藤沢市付近、15時半頃に千葉県船橋市付近にそれぞれ再上陸した後、三陸沿いに進み、23日3時に三陸沖で熱帯低気圧になった。	[死傷者]死者 6人、負傷者 29人 [建物被害等]住家全半壊、一部損壊 160棟、床上浸水 299棟、床下浸水 894棟		・気象庁Webサイト http://www.data.kishou.go.jp/
2001	平成	13	2001.9	前線・低気圧	九州南部・四国	期間降水量 673mm(屋久島)、616mm(高知県土佐清水市)	○2日から4日にかけて、前線が日本の南海上に停滞し、九州南部を中心に大雨となった。5日に九州西海上で低気圧が発生し、発達しながら6日に山陰沖を通過し、7日に日本海中部に進んだ。6日には、前線に向かって暖湿気流が流れ込み、四国地方から九州南部地方を中心に大雨となった。	[死傷者]負傷者 8人 [建物被害等]住家全半壊、一部損壊 306棟、床上浸水 272棟、床下浸水 906棟		・気象庁Webサイト http://www.data.kishou.go.jp/
2001	平成	13	2001.9	台風第15号	東海・関東	期間降水量 895mm(栃木県日光市)	○台風第15号は、9月4日南鳥島の南海上で発生し、発達しながら北上した。9日、本州の南海上で勢力を弱めながら北東向きを変え、11日9時半頃神奈川県鎌倉市付近に上陸した。台風は次第に弱まりながら、東京都から茨城県北部を経て海上に進み、12日15時に千葉県島田付近で温帯低気圧に変わった。	[死傷者]死者・行方不明者 8人、負傷者 51人 [建物被害等]住家全半壊、一部損壊 300棟、床上浸水 183棟、床下浸水 1,202棟		・気象庁Webサイト http://www.data.kishou.go.jp/
2001	平成	13	2001.9	台風第16号	東海・関東	期間降水量 967.5mm(久米島)、551.5mm(那覇) 最大瞬間風速 50.8m/s(久米島)、41.7m/s(那覇)	○台風第16号は、9月6日西表島の北海上で発生し、東に入ってきた。7日7時半頃沖縄本島南部を通過し、同島東海上でループを描いた後北西に進み、8日3時半頃同島中部を通過した。台風は、同島西海上で3日間にわたりループを描いた後、久米島の南海上で停滞したため、14日まで7日間にわたりこの海域にあった。その後南西に進み、16日夜台湾に上陸したあと、21日に華南に上陸し熱帯低気圧になった。	[死傷者]死者・行方不明者 2人、負傷者 9人 [建物被害等]住家全半壊、一部損壊 814棟、床上浸水 534棟		・気象庁Webサイト http://www.data.kishou.go.jp/

表 過去の災害被害(風水害)

西暦	年号	年	発災日 (西暦)	災害名	被災地域	規模の大きさ等	被災状況		その他(当該災害の教訓をもとに導入された制度、原資料名やその所在場所、その他)	
							(ア)概要(発災の状況、復旧・復興のためにとられた措置、経済社会的影響、各種エピソード等)	(イ)被害数(死者数、倒壊建物数)	その他コメント	参考文献
2002	平成	14	2002.7	台風第6号・梅雨前線	東日本・北日本	日降水量 495mm(岐阜県根尾村) 期間降水量 510mm(岐阜県根尾村)、 318.5mm(静岡) 最大風速 27.3m/s	○台風第6号は、6月29日にトラック島近海で発生し、発達しながら北西に進み、7月7日には非常に強い勢力となった。9日南大東島の東海上で次第に勢力を弱めながら北東に向きを変え、11日0時過ぎ千葉県館山市付近に上陸し、鹿島灘から三陸沖を北北東に進み、11日21時頃北海道釧路市付近に再上陸した。その後オホーツク海に進み12日0時に温帯低気圧に変わった。この間、梅雨前線が本州上に停滞し活発となったため、中部地方から東北地方にかけて大雨となった。 ○この大雨の影響で、各地で河川の増水や氾濫、浸水や土砂災害が発生し、避難勧告や避難指示が出された。また、10日夕方には台風接近に伴い利根川を挟み埼玉県から群馬県にかけての地域で竜巻と思われる突風が発生し、けが人や家屋の全半壊などの被害が出た。 ○岩手県東山町では、河川の氾濫による被害が大きく、猿沢川の鉄砲水によって被害が拡大した。流木とともに多量の土砂が一気に流れ込み、役場下の商店街が壊滅的な被害を受けた。	[死傷者]死者・行方不明者 7人、負傷者 29人 [建物被害等]住家全半壊 41棟、一部損壊 162棟、床上・床下浸水 約 10,000棟		・気象庁Webサイト http://www.data.kishou.go.jp/
2002	平成	14	2002.9	台風第21号	関東・北日本	期間降水量 346mm(神奈川県箱根町)、198mm(北海道広尾町) 最大瞬間風速 53.0m/s(石廊崎)	○9月27日3時に、南鳥島の南海上で発生した台風第21号は、発達しながら西に進み、30日に沖の鳥島の北海上で進路を北に変え、速度を上げながら日本の南海上を北北東に進んだ。台風は、強い勢力のまま10月1日20時ごろ神奈川県三浦半島を通過し、21時半ごろ神奈川県川崎市付近に上陸した。その後関東東地方、東北地方を通過し、2日6時ごろ北海道苫小牧市付近に再上陸した。その後、北海道を北に進み、2日15時にサハリンの西海上で温帯低気圧に変わった。	[死傷者]死者 5人、負傷者 88人 [建物被害等]住家全半壊 18棟、一部損壊 383棟、床上浸水 203棟、床下浸水 1,352棟		・気象庁Webサイト http://www.data.kishou.go.jp/